

「農業技術の匠」：^{かわい}河合 ^{きよはる}清治 さん（愛知県田原市）
～ きくの直挿し栽培技術の開発 ～



〔河合 清治さん〕

1 技術確立の背景(目的)

農業の国際化が進む中、花き栽培も例外ではなく、省力化・低コスト生産が求められていました。

こうした中、河合さんは、定植時に捨てた未発根の苗がいつの間にか活着し、時には発根苗より旺盛に生育することをヒントに、本ぼに直接挿し芽を行う、直挿し栽培技術を開発しました。

2 技術概要(技術効果)

(1) 従来、きくは挿し床に挿し芽を行い、そこから発根した苗を定植しますが、この直挿し栽培は、本ぼに直接挿し芽を行う方法であり、育苗、移植作業が不要となります。

このため、10a当たり労働時間は、従来の栽培(夏秋ぎく：690時間)より約50時間の省力化が可能となります。

(2) 初期生育は慣行栽培よりもやや遅れますが、生育後半になっても草勢は維持されることから、収量、品質は確保されます。

3 技術の地域への活用状況(普及状況)

昭和62年に夏ギク「精雲」で河合氏が直挿し栽培を実用化した後、田原市の若見地区(旧赤羽根町若見地区)の仲間に直挿し栽培を勧め、平成4年には20人の農業者が直挿し栽培に取り組んで、ほとんどの人が成功した結果、このことが話題となり、同市赤羽根地域に普及しました。

また、平成5年には秋ギク「秀芳の力」でも実用化したことから、九州をはじめ全国的にも普及しています。

現在は、田原市で栽培される主要品種(秋ギクの「神馬」、「精興の誠」、夏秋ギクの「岩の白扇」、スプレーギク)においても直挿し栽培技術は継承され、田原市のキク農家の70%で行われているほか、直挿し栽培は、技術の改善により低温期の栽培期間を短縮する栽培技術として節油効果についても期待されており、新たな技術改善の取組が継続して行われています。



〔本ぼへの直挿し栽培〕

※最寄りの普及指導センター { 愛知県東三河農林水産事務所田原農業普及指導センター
住所：愛知県田原市加治町南恩中7-5
TEL：0531-22-0381

<「農業技術の匠」のポイント>

優れた観察力により編み出した低コスト・省力化生産技術

- ① 本ぽに直接挿し芽を行う栽培方法で、慣行栽培における育苗、移植作業が省略でき、10a当たり約50時間省力となる。
- ② 直挿し栽培では、挿し穂基部から発根するため、直挿しする時に挿し穂の基部を折らないよう注意する。
- ③ 挿し穂は、発根苗の定植と同様の間隔で基部を傷めないよう本ぽに直挿し、直挿し後は十分に灌水する。
- ④ 直挿し後活着するまで、乾燥防止のためにポリフィルム等で被覆するが、高温期には直射日光が当たると地温上昇によって挿し穂が蒸れて腐ってしまうことがあるので、室温と水分の管理に注意が必要である。

直挿し作業後の様子⇒



【直挿し栽培と慣行栽培の流れの比較】

<直挿し栽培>

挿し芽の採穂
↓
挿し芽の予冷
↓
本ぽへの挿し芽

<慣行栽培>

挿し芽の採穂
↓
挿し芽の予冷
↓
育苗挿し床への挿し芽
↓
発根後、挿し床からの採苗
↓
本ぽへの定植(移植)



直挿し1ヶ月後
(ポリフィルムを外して活着状況を確認)

※輪ギクの直挿し栽培技術については、河合さんの大苗利用のアイデアをもとに、愛知県田原農業普及指導センターが河合さんと連携して、輪ギクの直挿し栽培における大苗利用の実証展示に取り組んでおり、直挿し栽培に関する新たな技術改善の取組は継続して行われています。